

こども環境学会 2006年大会および国際シンポジウム 概要報告

テーマ「こどもと自然」

開催概要

開催日: 2006年4月28日(金) ~ 30日(日)

会場: 武庫川女子大学(兵庫県西宮市)

共催: 兵庫県、西宮市

後援: 国土交通省、文部科学省、厚生労働省、環境省、神戸市、(社)日本ユネスコ協会連盟、(財)日本ユニセフ協会日本子どもNPOセンター、IPA日本支部、(社)日本建築学会、日本環境教育学会、(社)日本都市計画学会、(社)日本造園学会、日本発達心理学会、(社)日本体育学会、日本保育学会、日本子ども社会学会、日本安全教育学会、人間・環境学会、(財)国際交通安全学会、(社)日本小児保健協会、(社)日本公園緑地協会、(財)公園緑地管理財団、(財)都市緑化基金、(財)都市緑化技術開発機構、(社)日本建築家協会、(社)都市計画コンサルタント協会、(社)日本造園建設業協会、(者)日本公園施設業協会、(社)全国建設室内工事業協会(順不同)

参加者数: 約500人(3日間の延べ参加者数)

28日エクスカッション参加者: 約40人、29日国際シンポジウム参加者: 約250人、30日シンポジウム参加者: 約200人、28~29日分科会(6つの合計)参加者: 約300人、29~30日ポスターセッション発表: 38人、団体展示参加: 10団体

第1日: 4月28日(金)

エクスカッション

コーディネーター: 壽崎かすみ(龍谷大学助教授)、高桑進(京都女子大学短期大学部教授)、小川雅由(元・西宮市環境都市推進グループ課長)

こどもの遊び体験や環境教育の実践施設の事例として、西宮市内のプレーパーク「みやっこキッズパーク」、甲山自然環境センター、「西宮市立平木小学校」を視察。参加者36名。



第2日: 4月29日(土)

あいさつ:

岡崎甚幸(武庫川女子大学教授・建築学)、井戸敏三(兵庫県知事)、山田知(西宮市長)、仙田満(東京工業大学名誉教授、本会会長・環境建築家)

基調講演: 「こどもと自然」

清水將之(関西国際大学教授・児童精神医学)

日本と西洋の子ども観の歴史的な変遷を絵画などによって検証しながら、子どもが「命を守られる」「保護される」「愛される」「遊ぶ」などの権利を持つもので守られるべき存在であるとし、そのために親や大人が遊び心を持つことが重要であると述べた。

国際シンポジウム「こどもと自然」

コーディネーター: 汐見稔幸(東京大学教授、本会副会長)、スーザン・ハンフリーズ(英国クームスクール初代校長) 自らの小学校校庭を自然豊かな環境に改善し、そこで行ってきたアウトドア・クラスルーム活動の実践を紹介しながら、子どもの自然体験の重要性を訴えた。



ファッテン・ベン・アブデラジズ(WHO神戸センター) 自然欠乏症の問題点をあげながら、子どもたちの参画による子どもにやさしい都市政策の必要性を説いた。

加用文男(京都教育大学教授・幼児教育学)

乳幼児期からの身の回りの自然素材との慣れ親しみの重要性を強調し、例として「泥だんごづくり」を紹介した。崎野隆一郎(ハローウッズ森のプロデューサー・自然体験) プログラムリーダーとしていかに子どもや親たちに自然との付き合い方を教えられるかを述べた。

各講師らが会場と意見交換する中で、こどもの成育段階で感性や創造性を育む上での自然体験の重要性が確認され、そのための環境づくり必要性が提言されました。



第1回こども環境学会賞発表

第1回こども環境学会賞の発表が行われ、論文賞3件、論文奨励賞1件、デザイン賞2件、デザイン奨励賞2件、活動賞2件、活動奨励賞4件が授与されました。

総会

2005年度事業報告、2005年度決算、2006年度役員就任、2006年度事業計画、2006年度予算がそれぞれ報告され、全会一致で承認されました。

こども人形浄瑠璃と懇親会

南あわじ市立三原中学校の生徒による人形浄瑠璃が上演されました。引き続き参加者相互の懇親会が行われました。



第3日：4月30日（日）

特別講演：「チンパンジーにおける子どもを育む環境」

松沢哲郎（京都大学霊長類研究所所長、思考言語分野教授）チンパンジーの研究を通して、人の子育てを特徴づけるものもあきらかになってきた。「教える」という積極的教示と、「認める」という社会的承認、その背景にある「寄り添う」関係である。人間の母子は、生まれながらにして、物理的に切り離れている。母子がしがみつき・抱きしめるのではなく、「寄り添う」という新たな親子関係をつむぎだした。離れているからこそ、コミュニケーションが必要となる。顔や声や身振りで母子がやりとりをするのは人間の特徴だ。こうした親子の関係を大事にする環境が子どもを育む環境である。

フロアセッションおよび総括

分科会など大会で提議された問題点を整理し、大会の総括として提言をまとめることが確認されました。



29日（土）～30日（日）

分科会

下記の6つのテーマが取り上げられ、それぞれの問題に取り組む方々からの話題提供と提言にもとづいて参加者による議論がなされました。

「自然を体験する」 神谷明宏（聖徳大学助教授）

・子どもたちを自然へいざなう大人を育てることが大切。
・名もない自然のあそびの原体験を大切に。
・用意されたプログラムではなく、自然の中での生活体験を。

「職能としてのプレイリーダー」 梶木典子（神戸女子大学講師）

・プレイリーダーとは子どものあそびに深くかかわる大人であり、専門性が求められ、職能として認める必要。
・プレイリーダーは人や地域をつなげるコーディネーターでもあり、そのような人材の育成をしていく必要がある。

「自然環境と子どもの健康」 織田正昭（東京大学教官）

・生活に根ざした自然との触れ合いを通して、子どもの心身の健康を。
・子どもの自然理解のための組織づくりを。
・自然体験が健康に影響することをアピール。
・現代の子どもの心の問題は自然体験の少なさによる。

「自然災害と子どもの遊び」 清水将之（関西国際大学教授）

・子どもの安全感を回復し、日常性に復帰させるためにあそびは重要。
・被災地では、道具なしにあそべる術を日常的に身に付けておき、現場で臨機応変に。
・直後、3ヶ月間など、あそびのニーズは時と共に変化する。
・子どもは10年間など長期にわたる見守りが必要である。

「子どもの発達と自然」 井上美智子（近畿福祉大学教授）

・子どもが自然とかかわることは自己形成の過程である。
・育っていく子どもに寄り添うことが大切で、それは大人が自己を再発見する過程でもある。
・子どもには、身近な小さな自然が大切で、それを作り出すのは大人の役目。

「都市につくる自然」 渡邊公生（日本バウビオロギー協会）
・生き物に学ぶ。 - - - 自然力の有効性を導き出す。人工的な中にどうすれば生命環境をつくるか。
・周囲の環境の整合性をもつ。子どもへのあそび場提供としての自然（水、空気、命）
・環境と人との関係の全体的視点。



学術ポスターセッション

「園庭・自然体験」、「遊び場・遊び環境」、「園舎・空間利用」、「環境教育・相談」、「キャンプ活動・行動」、「家族問題・教育」、「道路・都市環境」、「デザイン教育・活動」など、38題が発表されました。今年度より、『優秀ポスター発表賞』が設けられ、4題が表彰されました。

団体出展参加

NPOなど8団体、兵庫県（6件）、姫路市の展示参加がありました。



子ども参加プログラム「プレイフル・サンドアート」

コーディネーター：笠間浩幸（同志社女子大学教授・幼児教育）、川北典子（平安女学院大学講師・児童学）、島田隆道（名古屋短期大学教授・生命環境学）、梶木典子（神戸女子大学講師）

4月22日に神戸市須磨海岸において神戸市および地元商店街などの協力を得て、一般参加者180人、ボランティアスタッフ60人、合計24人によるサンドアート（砂の造形）の製作を行った。大会当日は、会場中庭および武庫川女子大学附属幼稚園に特設砂場を設け、デモンストレーションと幼児ワークショップを行った。

地域や大学間の協力によって大好評であったことから、今後も関西地域でのイベントとして継続的に取り組むことが期待される。

